

## 真夏のオアシス・ドリーム【第四章】

旭に謝った日から、少なくともそれ以前よりは充実した夏休みを送っていた。

一緒に遊びに行ったりもしたし、旭が『三日月園』についてくるようにもなった。

……子どもたちにはからかわれっぱなしだったが。

告白とかはしていないが、半ば付き合ってるような感じではあった。

ただ、どうしても気になることがあった。

耕介と連絡がとれなくなった。

というよりも、取りづらくなってしまっていた。

「そういえば、耕介と連絡取ってる？」

その日も、旭のほうから話題に出てきた。俺はなんとなく応えづらくて、さあ、と言って視線を逸らしてしまった。

「ちゃんと応えてよ」

「連絡がつかねえんだよ。つか、お前もだろ？」

俺は、意識的に耕介の話題を避けようとしていた。

そのとき、旭の表情を見ておくべきだったかもしれない。次は決定的なものになってしまった。

「それより、次はどのアトラクション行くか？」

俺は、遊園地のパンフを広げた。

旭は口を半開きにして、こちらを凝視していた。驚いているようだった。

すると突然、俺の手にあったパンフを叩き落とした。

「おい」

「僚」

旭は、俯いてこちらを見ていなかった。

「ねえ、あんなに夏休みに入る前は仲良しだったのに、私たちどうしちゃったんだろう」

顔を上げた旭と目が合った。涙が滲んでいた。

「私、帰るね。ちよつと考えたい」

背を向けた旭を止めようとしたが、振り返りもせずこう言ってきた。

「来ないで！」

そして、そのまま走り去り、群衆の中に消えてしまった。俺は、周囲の連中が無関心に通り過ぎる中、追いかけることもできなかった。

【第五章へ続く】